

報告

田北氏と先祖供養

田北 暢舟

はじめに

田北氏は大友氏の分家であり、はっきりした歴史があるのに対し、是れまで祖先の供養も行われていない。そこで田北家発祥の地田北郷（直入町下竹田）に於て五十餘戸に呼びかけて、供養をしようではないかということで、殆んどの人が呼応して毎年行うことにした。

そして回を重ねるに随つて、縣内各地の田北家及び田北家縁故の人々が集ることになった。たまたま昭和四十六年六月の大分縣地方史研究会の際、田北祭に案内せぬのは間違っているじやないかと冗談交りに話されて、極めて簡単に状況を報告した。委員長の渡辺澄夫先生から、ぜひそれを地方史に発表してもらいたいという事になった。

じつは私の消極的な気分も手傳つて、田北氏の自慢話を並べる様に考へられはせぬかという気がしていたのだが、すすめに随つ

て執筆することにした。

田北氏の起原

姓というものは最初は源平藤橘と四姓が源であり、分家其他によつて生じ、又明治四年の戸籍法によりて姓をつけることになつて適宜につけたものもある様である。

私の近所に、若い時から時代物の小説を讀むのが好きであつた古老がある。昔から小説の中に種々の苗字が出て来るが、田北という苗字は見たことがないという。もちろんそうかもしれないが、田北姓は六百年以上前に生れている。

田北氏は、豊後大友氏の主な分家の一つで、大友氏三代目から分家して生じた。源頼朝の庶子能直は、母方の姓をとり大友能直として豊後の守護職となり、建久七年豊後に着いた。これが大友氏の起りである。

大友の姓も相模の國の地名から起つている。大友第二代親秀に七子があり、長子頼泰は世を継ぎ、二子以下各地に分家した。その第七子が田北郷に領地を得て、地名をとつて田北大炊判官代親泰と名のつた。これが田北氏の初代である。

系圖を示すと次のようである。

大友能直——二代親秀——

- 長子 頼泰 大友本家三代目
- 二男 重秀 戸次次郎左衛門尉、戸次氏ノ祖
- 三男 能泰 或ハ直重ト云ヒ、挾間大炊四郎、挾間氏ノ祖
- 四男 頼宗 野津五郎、野津氏ノ祖
- 五男 親重 木付大炊六郎、木付氏ノ祖
- 六男 良慶 僧トナリ大野莊酒井寺院主
- 七男 親泰 大炊判官代、田北氏ノ祖

『豊後国志』によると、

田北親泰

大友親秀第七子為判官代始領朽網田北、因爲氏、世居焉、

とあり、

居城松牟礼を築き、これが代々田北氏の城であった。城は田北郷即ち現在の直入町大字上田北の北端にあり、三面絶壁で要塞堅固である。

同じく『豊後国志』には、

松牟礼城

在朽網郷橋木村北、屹立高峻群山圍繞、飛龍映帶、田北氏世保焉、以為戒備、天正之役、城主田北統員従大友義統、在豊前龍王城、其母及家宰守之、薩將新納久將、察其險要不可拔遂不攻而去

と。城趾今在し長い空堀や水を汲んでいたという「イノコアラシ」の名が残っている。

本城に対する支城として、現在城山という三田岩壁の城跡があり、上に八幡社があり、空堀の跡、又「コングリコ」といはれている岩の間を下との連絡小通りがある。

「コングリコ」は、クグリ戸の訛ったものである。親泰が入地以来旧今市村の一部（現大分郡野津原町今市地区）旧下竹田村（現在の直入町上、下両田北）旧阿蘇野村（現大分郡庄内町阿蘇野地区）の大部を領し大友氏の重臣として代々忠節を尽して来た。

大友氏は豊太閤の朝鮮の役に出陣を命ぜられて出陣したが、不都合の藤（小西行長が蔚山の城にて苦戦せしを助け得なかつたという）により、豊太閤より國除せられ領地を没収せられた。随つて旗下の諸将も領地を失い、大友氏は二十二代を以て終り、田北氏は土着する者又は、豊後内各地に分散移住するに至つた。初

代田北親泰以来三百六十餘年であった。

供養を始めるに至った動機

自家田北氏の歴史を知らんと模索している中に、日田郡に田北塔とて田北大和守紹鉄の戦死の墓あることが分った。大山荘萬々金とか松原村とか出ているが、広い日田郡で現在行政上の何村の内か分らず、縁ある度に聞き出そうとしている中に、旧五馬村から材木買いに湯浅といふ人が来て色々と話している時、私の村にジヨウ鉄様とてよく信仰して参る所があるということで、次々と尋ねて見ると大山村と五馬村にあるということで、どちらが本当かと早速大山村長と五馬村長とにお尋ねの手紙を出したら、両村長さんから委しい手紙を下さった。

即ち大山村松原に田北大和守紹鉄の墓あり、大山川を隔て、五馬村小迫に紹鉄夫人及び十二待女の墓があること、そして日田図書館に紹鉄討死の由来を豊西雜志というのに書かれてあると教えて下さった。

これで墓参せねばと発起して取りあえず手近い下竹田中と東庄内、大分市内の一、二の人に働きかけ、日田地方の地理を詳知せ

ぬまゝ七人が参加した。昭和二十六年九月のことであった。下竹田からは山及山サンギウザンという険しい山を越え久大線の庄内駅から汽車に、日田で下車、そして桑野三雄大山村長ちきまきに案内してくれて、大山田北塔に参り、杖立に一泊翌日五馬の田北塔に参り帰村した。この時郷里を遠く距って土地の人々により吾々先祖を祀って下さっている。毎年お祭をして下さっているのに、地元で先祖供養をしないのは大きな心得違いだ。是れから先祖供養をしようではないかと発展し、同意をえて何年か過ぎて再度日田参りが行われ、昭和三十七年一月二十日に第一回供養が智雲寺で行われた。

下竹田地方では一部の部落で工藤、森田、小野、大塚、塩手、小原等が四五軒又は五、六軒位で、正月二十日に先祖祭りをやっている、之に倣つてのことであつた。

其後田北氏が分家所領を得たのは、古文書によつて嘉禎二年三月十七日とあることがわかり、三月十七日が記念すべき日なので、この日に行ふことにしたが、行なつて居る中に色々勤務している人も多いので、十七日を基本として其前後の日に行ふことにした。

然るに此の会の運営連絡は私一人の仕事で、協力者はあるがガリ版刷りで判っている分に発送する。郵便料等一切手出しでやっ

て居たが、出席者の中から特志として金員を出して下さる人もあり、本年は三月十四日竹田市十川滝上寺黒野大量師の寺で行ったが、協議の中にはそれから会員組織にし、会員に入らない者は通知せずともよく、会費年三百円とし、これは運営費であるという事になった。

そして大友氏、田北氏の歴史其他をプリントして会員に配ってほしいという要望もあり、又地方に依つては私に出かけて由緒縁起を話してもらいたいという希望もあつた。通知発送も毎年連絡のある人は名前も分っているが、まだはつきりせぬ人も多い。私としては成る可く関係者全部に知らせ、集る様にしたいと思つている。

供養会の様式

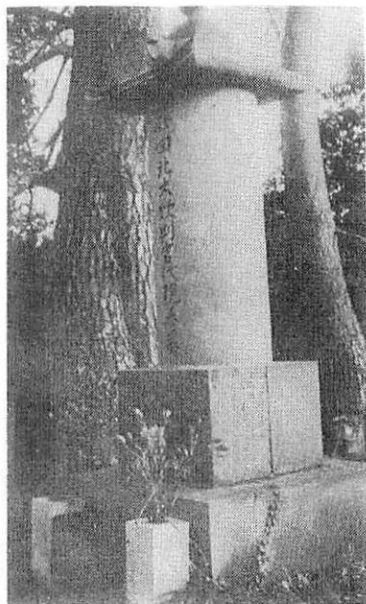
様式はあまり堅苦しいことは避け、平易なものである。遠くからの人もあるので時間は十一時としてある。先づ簡単な挨拶をして、用意した「田北諸家祖先位儀」の位牌を供へ、前で短い御経をあげる。昨年度までは私一人であつたが、本年度は寺が関係者に三ヶ寺あるので三人の僧住職である。

竹田滝上寺の黒野さん、緒方町小宛の南林寺の田北憲章さんと私である。

経後会場主の挨拶に次いで、私が清和天皇以来、源頼朝・大友の能直・大友三代目から分家して七男が田北郷に入りて田北姓の生れたこと、次で大友家の重臣として久しく仕へ、大友氏の国除と共に田北氏も土着して各地に分散したことを、系譜を中心として概略を約一時間余り話し出席者の寸談も出る。

各地から集るので全く初対面の人も可なりあるので、出身地庄所等自己紹介して宴席に移る。初めは会費が二百円位から今年度五百円にしたが、膳部は軽小のものしか出来ない訳だが、会所の方が心一ぱいしてくれるので立派な膳部で酒が廻る。次第に賑かになり、それぞれの土地の話や、遺跡の話と次々にうるわしい親しい兄弟の集まった様な気分である。各自のかくし芸、自慢の唄も出る。大体時間の制限はないが二時間位で、「田北家万歳」の三唱でポツポツ散会する。

今年の会場滝上寺は竹田の稲葉川と濁淵川の合流地で、岩石岩盤の間を水が流れて前には岡城址が突立っている。近所の川に添うて、旧士族の家というのがある閑静な所である。黒野住職は八



十三歳といふが、若い時代から熱心に描いていた画が近年東京で入選したりして名勢が高くなっている。困碁も断然勝れた腕あり、有名な漢学者でもあり常任漢詩など作が多い。
 本会でうるはしい盛大な会であつたと、黒野老師は非常な御満悦であつた。

会名は松牟礼会

この会を田北会とつける説もあつたが、それではあまりムキ出しの様な感じがするので、田北氏の城名をとつて松牟礼会とすることに決した。

田北家丈けでなく、田北縁故の人も進んで参加されているので、其の名が親しみ深いようだ。

(写真説明)

右 田北氏始祖田北親泰墓

直入郡直入町上田北

左 田北氏先祖供養記念写真

田北氏の散在地

確實に調査が行き届いている譯ではないが、是れまでに到明している田北及び田北縁故者の分布は、

直入町の上、下田北、長湯地区

久住町、久住神馬、都野

竹田市竹田、宮城の志土知、竹田十川

大野郡緒方町下自在、小富士小宛

大野郡三重町市場

大分市内諸地

大分郡庄内町南庄内野畑、東庄内大龍、西庄内橋詰

別府市各地

速見郡日出町川崎、日出、藤原

日田郡天ヶ瀬町五馬

以上の外大分市鶴崎周辺、

熊本縣阿蘇郡小国町満願寺

福岡縣久留米市近在

等は連絡とれていない。尚ほ明治後近年になって、大都市に移

住又い分布しているもの相當数に上っている。

是までの会場・参加者数

第一回昭和三十七年一月二十日 参加十九人 会場 直入郡直入

町上田北 智雲寺

第二回昭和三十八年一月二十日 参加十四人 会場 智雲寺

第三回昭和三十九年一月二十日 参加十一人 会場 智雲寺

第四回昭和四十年一月二十日 参加十人 会場 智雲寺

第五回昭和四十一年一月二十日 参加十人 会場 智雲寺

第六回昭和四十二年三月十七日 参加十八人 会場 智雲寺

第七回昭和四十三年三月十七日 参加十六人 会場 速見郡日出

町川崎 田北穆壽氏宅

第八回昭和四十四年三月十六日 参加二十二人 会場 直入郡直

入町上田北 智雲寺

第九回昭和四十五年三月十五日 参加十七人 会場 直入郡直入

町下田北 田北良一宅

第十回昭和四十六年三月十四日 参加二十五人 会場 竹田市十

川 龍上寺黒野大量氏宅

久しい以前から直入町下田北の山浦、大分部庄内町東庄内、大野郡緒方町小宛其他で五戸、十戸、二十戸で先祖祭として行っていたものであったが、この催しが統合された様な形で次第に大きくなり、集る人も範圍が廣く盛大になってきた。

むすび

直入町大字上田北原山の部落は田北姓ばかりで、墓も一ヶ所で大墓と呼ばれている。そして其の中央より少し東寄りに、三メートル四角、高さ八十センチの石垣積みの中央に石碑があるが、表面が崩れて文字は不明になっているが、昔から大先祖墓といわれている。私の寺の石碑群の中央である。古来の状態を變へることはよくないとも考へたが、何分文字が全然不明になっているので、はっきり分る様にしようと小部落十戸に呼びかけ、台石から約二メートルの塔碑を立てた。昭和四十四年十二月二十二日雪の降る寒い日であった。明治から百年目の終ろうとする年末で、田北氏元祖田北大吹判官代親泰墓と刻してある。

永遠に祖先を偲び祖先に恥じず努力して、供養を続けたいと思つている。

智雲寺縁起

大友氏二十二代義統の時、豊大岡より國除されしにより大友旗下の諸士も之に隨つて領地を失ひしにより、土着して農を營む者、何等かの縁で他地に移住する者、又は新たな藩に仕ふる者等、豊後は大混乱し、田北氏も同様であつた。

是れより前天正七八年の頃薩摩島津軍は日向豊後に乱入したが、大友軍が日向出軍の時田北の諸將は先陣を受けて奮戦し高城、美々津川にて多数の戦死者を出したが、豊後国除の後残れる一族にて議をこらし、日向其他にて戦死の人々の菩提を弔わんとて、田北本家の長子即ち統生の長男親生を出家得度せしめた時は明暦二年であつた。

次で一寺の建立は万治二年、それより延宝五年本願寺常如法王より木仏本尊并に寺號を賜わる。

昭和四十六年の本年まで十七代三百十二年である。

明治二十年四月一日夜火災あり。部落八戸と共に類焼し本堂庫裡樓門土藏等焼失す。この時土藏は安全だと思ひ、寺宝、家宝等土藏に入れしに、最後に土藏は蒸し焼となり、火を免し宝物の殆んどを失つた。然し他に残つた切れ切れにより大要は分つたが、

寺宝の過古帳の前記を失い不明になったので、何とか調査せんとした次第である。

寺の墓即ち原山部落の墓石を一々調べたのに、有り難いことに長い間には寺の衰へたる時もあったるうが、開基宗智（親生の僧號以来全部各代の墓碑ありて、私まで十七代の名前まではっきりしたのは喜ばしいことであった。是れに依つて田北家の系圖も完成

新刊紹介

文化財保護の手びき

このほど県教育委員会文化室の編になる『文化財保護の手びき』が刊行された。同書は県内の文化財愛護思想普及の一助とするために編まれたもので、総説・解説・大分県文化財年表の三部からなっている。

総説では「文化財の定義と保護」について述べ、さらに文化財保護の歴史や保護のあり方・文化財の指定・大分県の歴史と文化財などわかりやすく平易な文章で記述されている。

「解説」では県内の文化財を種類別に解説し、「文化財年表」では日本・世界史年表と対比しながら県内の文化財を編年している。そして少ないページ数の中で、県内文化財の写真八三枚・伽

藍配置図四面を収めるなど編集に意を配り、一般にこの種の解説書がもつ堅苦しさをやわらげている点は、文化財保護に意欲的な編者の姿勢を示すものであるう。

同書は郷土史研究者の必携書であると同時に、中・高校日本史の副読本として、さらに歴史クラブ等クラブ活動のテキストとして推奨したい文化財の入門書である。

なお、同書購入希望者は県教育委員会文化室に申し込めばよい。

A五版八九頁・頒価一五〇円・送料五五円（満）